

## 保育園での「哲学対話」の実践 — 考える力は生きる力 —

吉村直記（おへそグループ統括園長）

### 1. 保育園で取り組む「哲学対話」

当園では2012年より子どもたちと「哲学対話」に取り組んでいます。初めて子どもたちが哲学する「哲学対話」の存在を知ったのは、フランスのドキュメンタリー映画「小さな哲学者たち」を観たときです。フランスの幼稚園に通う3歳～5歳児の子どもたちが「愛とは何か」とか「生きるとは何か」という子どもにとってみれば難しいと思えるテーマについて思い思いに意見を言い合っている姿を見て、日本の教育の中でどのくらい自由に意見を言い合える時間が確保できているのだろう、と思ったのがきっかけでした。調べてみると、日本にも「哲学対話」を研究されている方々がいて、たくさんのご助言、ご指導をいただきながら、取り組み始め、早いものでもう7年ほど経ちました。



## 2. 子どもたちの変化

「哲学しよう」と初めて子どもたちを誘い、最初に投げかけてみたテーマは「優しいって何？」というものでした。『映画で見たフランスの子どもたちくらいに活発に発言し、意見し合えるようになるまでには数年はかかるだろう』と想定していたのですが、それは覆され、「優しいってというのはね、赤ちゃんの頭をよしよしすることだよ」とか、「優しいって、人が嬉しくなるってことだよ」とか、「怒ることも優しさだってお母さんが言っていた」とか、子どもたちからは思いもよらぬ言葉が次から次に出てきました。

子どもたちは大人が思っている以上に色んなことを考えていて、親の話、先生の話聴いていて、自分の言葉を持っている。実は、子どもたちが成長していないのではなく、大人の私たちが耳を傾ける機会が少なかったのだと衝撃を受けたことを鮮明に覚えています。

それからは職員一丸となって対話のファシリテーターとしてのスキルを学び、子どもたちの言葉をさらに引き出せるように取り組んできました。今では、自分たちから「先生、今日はさ、人間はどうやって創られたかを話そうよ」とか、「好きな色があるのはなぜ？」とか、私自身考えつきもしないようなテーマが子どもたちからあがってきます。日常的にも「じゃあ、そのテーマについて『哲学』してみよう！」と保育者を誘うなど「哲学対話」を意欲的に楽しむ姿が見られています。

具体的な「哲学対話の成果」とまでは言えるか分かりませんが、同じ小学校に入学し、同じクラスになった卒園児2名について担任の先生から「貴園の児童はおしゃべりが多いですね。それは悪い意味ではなく、2人は対話的に授業に参加する姿勢があります。質問に対して、積極的に発言し、分からないことを臆することなく問うてくれます」というお言葉をいただきました。他の小学校に入学した卒園児に対しても「1年生は教師が提案することが多いのですがA君は何かを企画しようと提案すると、色々なアイデアを積極的に出してくれます」など、卒園児に対する主体性、意欲、考える力などを評価していただくことが多くなった

## 「実践」の扉

ように感じています。

### 3. 保育者の変化

子どもたち以外に保育者も大きく変化しました。保育現場で当たり前のように繰り返されている保育手法を保育者たち自身の「哲学的思考」によって見直すようになっていきました。例えば「誕生日表は必要か？誰のものか？」「お昼寝は絶対にしなければいけないのか？」「給食は全部食べなければいけないのか？」「運動会は本当に必要なのか？」「出席シールは必要なのか？」「おもちゃの片付けはみんなでしないといけないのか？」など、従来の保育を根本から問い直す機会が劇的に増えていきました。

「子どもたちがご飯の時間になっても、ランチホールへの集まりが悪い。呼んでもなかなか来てくれない」という課題が出た時は「みんなが同じ時間にご飯を取る必要性はあるのか」「協調性も必要だから友達が集まることを待つのも大切だろう」「子どもたちはお腹が空いていないから集まらないのではないか」など、「当たり前を問う習慣」が保育者に身についてきているように感じています。結果的に子どもたちの空腹を促すためにご飯の時間を遅くしたこと、ご飯の席をリザーブ方式にして子どもたちのネームプレートで好きな席を予約できるようにしたことによって、子どもたちは主体的に、そして意欲的にランチホールに集まるようになっていきました。「哲学対話」は子どもたちだけではなく、保育者にとっても大きな効果をもたらしてくれています。

#### 4. 対話を生む環境

2017年に保育施設を新築で開園することとなった際に「より対話が促される建築デザイン」をテーマに設計段階から考えることができました。保育室に敢えて段差を加えることで、みんなが顔を見合せて座れ、自然と対話を促すことができるようにデザインしました。そのスペースを「みずたまり」と名付けて、子どもたちの人気の場所となり、対話的に話す姿がよく見られています。

また、園内で「哲学対話」を実践する際は、映画「小さな哲学者たち」を真似してロウソクの火を灯して開始します。子どもたちの考えるスイッチになっているようです。明るい場所よりも少し暗い場所、広い場所より少し狭い場所など、ちょっとした環境構成の工夫で子どもたちが集中し、対話が盛んになります。

2018年8月には、ソフト面、ハード面の両面から子どもたちの育ちを支援している教育保育施設として特定非営利活動法人キッズデザイン協議会が主催する「キッズデザイン賞 子どもたちの創造性と未来を拓くデザイン部門」にてキッズデザイン賞2018年度(第12回)を受賞いたしました。

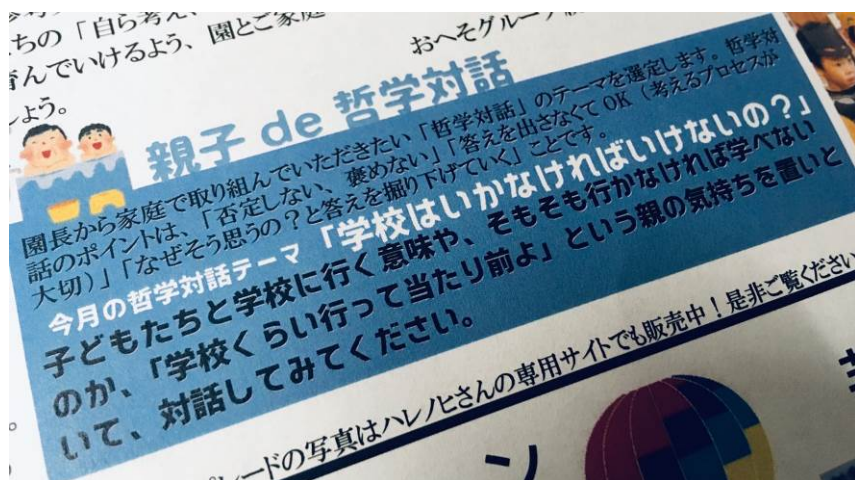


## 「実践」の扉

### 5. 「哲学対話」を特別なものにしたくない

保護者から哲学対話について「難しそう」「子どもにどう説明すればいいかわからない」などのご意見をいただくことがあります。私たちも「哲学対話」という言葉を聞いた時は、難しいものと感じたことを思い出します。

当園では「哲学対話」をなるべく難しいもの、特別なものであると捉えられないように家庭でもお父さん、お母さんと一緒に「哲学対話」ができるように毎月のお便りに「親子 de 哲学対話」と称して哲学のテーマを選定し、対話のポイントを書き、家庭で保護者がスムーズに対話ができるようサポートしています。



## 6. 考える力は生きる力

私たちは日々の人生の中で問うことを積み重ねながら、自分とは何者か、何が得意か、何をしたいのかを確立していくように思います。そのプロセスを他の誰かにしてもらえば、それだけ、考える機会、自分と対話する機会を奪うこととなります。子どもたちは自分との「問い」を積み重ねて、自己理解につながり、自分の長所を知り、自分の興味関心を知り、自分の幸せのあり方を知っていくのでしょうか。

引き続き、「哲学対話」を通して、子どもたちの幸せを微力ながら応援し続けていきたいと思っています。

